

【研究ノート】

## 趣味縁と橋渡し型社会関係資本に関する一考察

——趣味縁研究のレビューを中心に

千葉大学大学院人文公共学府人文公共学専攻博士後期課程

高木 悠希

### 1. はじめに

現代日本における人と人の関係を解明しようとするとき、もはや趣味によるつながりを無視することは出来ない。かつて個人のアイデンティティを保証していた家系や地域、会社といった伝統的な共同体が衰える一方で、生活の中の趣味活動は日本社会に生きる人々にとってますます重要度を高めており、今や趣味が人々を結び付け、自己表現の基準となる時代を迎えている（浅野 2012；片岡 2019：30-33）。同様に、既存の社会集団とは異なる新しい社会集団、「自発的結社」のひとつとしても、趣味コミュニティの重要性が指摘されている（鈴木 2014）。趣味コミュニティはおおよそ、共通の趣味や「楽しみ」の共有、ないしそれらに対する解釈への共感によって人々の間につながりを形成する、自発的な文化コミュニティと言いつつ表せよう。

こうした現状を背景に、趣味コミュニティは、自分の「好き」に基づいて人間関係を築けるという選択自由性や非拘束性といった特徴からも、血縁や地縁、社縁とは異なる形態のつながりとして期待され、ポジティブな意味で焦点が当たりやすい概念だと言える。しかし、趣味によるつながりは個人に生活の「楽しみ」をもたらす源泉となり得る一方で、決して永続的、楽観的なものとはいえず、しばしば何らかの共生規範<sup>1</sup>をつくって、成員の排除等のネガティブな側面をあらわすことも考えられるのではないか。筆者の関心は、こうした

<sup>1</sup> ここでは「趣味コミュニティの中で成員が共存し、関係維持していく為の規範」という意味でこの語を使う。

「楽しみ」を通じた共感の共同体における成員の包摂と排除の様相を追究し、趣味コミュニティの新たな一面を明らかにすることにある。この問題を追究する上では、趣味を通じた「つながり」の性質や役割について考察することが必要である。

そこで本稿は、上述の研究関心に則り、趣味を通じた「つながり」—趣味縁に関する先行研究をレビューすることで、今後の研究に求められる視点や留意すべき論点について整理し、考察することを目的とする。中でも、特に趣味縁の社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）としての側面に着目してレビューを行う。

## 2. 趣味コミュニティ・趣味縁をめぐって

最初に、本稿における趣味縁および趣味コミュニティの定義とレビューの方法、また社会関係資本に注目することの必要性について説明せねばならない。

### 2.1 趣味縁の定義

まず本稿で用いる「趣味」について整理しておきたい。従来の研究では、「ホビー (hobby) としての趣味」と「テイスト (taste) としての趣味」という、2つのやや異なる趣味が議論されてきた。テイストとしての趣味とはブルデューに代表される、階級的ハビトゥスを指す言葉である。日本での詳細な研究には北田・解体研 (2017)、片岡 (2019) 等があり、社会学における重要な論点となっている。

本稿では、個人がこだわりを持って取り組んでいる「楽しみ」を想定し、ホビーとしての趣味を定義に用いる。ただし、例えばジェンダーによって「修得すべき」とされる趣味が異なることから理解されるように、テイストとホビー、また文化資本と社会関係資本とは全く切り離されうるものではない。この事実については、趣味縁研究においても今後よく考慮・検討されねばならない問題だと考える。

およそホビーとしての趣味といえ、職業や専門としてではなく、個人が楽

しみで愛好していること」(明鏡国語辞典)と定義されており、趣味コミュニティとは、趣味の共通性で組織された共同体を意味する場合が一般的であろう。筆者は、浅野(2011)による「趣味によってつながる人間関係」(浅野2011:38)との定義をベースに、趣味縁を「共通する趣味、ないし趣味に対する共感によって結ばれた人間関係」と考え、趣味コミュニティを「共通する趣味を通じて結束し、共感を消費する共同体」と定義したいと考えている。レビューするいずれの先行研究でも、趣味縁の定義は浅野のそれと同義とみられるが、ある特定の趣味に基づくつながりを想定して「趣味縁」を指摘する大方の研究に対し、加藤(2016;2017)では地域に拠点を置く文化活動のプラットフォームを事例分析しているということもあり、様々な趣味や楽しみ、技能が持ち寄られる場を想定している点で、この語を用いる対象には多少の差異が存在すると言える。筆者の関心は前者の用法に近い。ただし、本稿の目的は趣味縁に関する先行研究をレビューすることにあるため、検討する論文は用法の如何に依らず趣味縁や趣味と人々のつながりを主題にしたものを取り扱うこととし、結論部で上述の定義と研究関心に基づいた考察を行うこととする。

## 2.2 レビューの方法

対象にするのは、日本における趣味縁ないし趣味によるコミュニティやつながりを主題に研究した、主に社会学的な論考である。先行研究に則って趣味縁概念の背景を概観した後、人々が趣味によって集団や友人関係を構成する有様について、近年の先行研究での検討を(橋渡し型)社会関係資本の観点から考察する。

## 2.3 社会関係資本について

本稿では社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)を、パットナムが定義した「社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」(Putnam2000=2006:14)に依拠するものとする。パットナムは、この社会関係資本について「結束型社会関係資本」と「橋渡し型社会関係資本」という2

種類への類型化を行った。「結束型」とは、「メンバーの選択やあるいは必要性によって、内向きの指向を持ち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化していくもの」であり、他方「橋渡し型」は、「外向きで、さまざまな社会的亀裂をまたいで人々を包含するネットワーク」と説明されている（同書：19）。ここで類似概念である「弱い紐帯<sup>2</sup>」との関係が気になるところだが、パットナムは後の論考において、社会関係資本を四つの類型<sup>3</sup>に細分化しており（Putnam and Goss2002=2013：8-10）、このうち「太い／細い社会関係資本」には、それぞれ「強い絆」「弱い絆」<sup>4</sup>と密接な関わりがあることを認めている。「弱い絆」は知り合い程度の関係性だと説明されている<sup>5</sup>ことから、そこには多分に異質な他者とのつながりが含まれることは想像に難くない。つまり、「太い／強い」は日常的に密接な関係性を持つ血縁・地縁・社縁といった従来型コミュニティを指しやすく、「細い／弱い絆」はこれらに対置されるものと解釈できよう。その点で「弱い絆」は、「互いに類似点のない人々を結びつける社会的ネットワーク」（同書：10）である「架橋型社会関係資本」<sup>6</sup>と一定の共通性を持つが、後者は接触機会よりも、異質な人々が橋渡しされているという関係性に注目していると言える。そして、本稿では趣味縁の社会関係資本性を考察するにあたり、特にこの「橋渡し型社会関係資本」に着目する。

藤田（1991）の「クロスオーバー型趣味縁社会」をはじめ、趣味縁という言葉の生まれた経緯からして、この概念はもともとその意味するところに橋渡し

<sup>2</sup> 個人間の紐帯について、マーク・グラノヴェッターが提唱した概念。ともに過ごす時間量、情緒的な強度、親密さ、助け合いの程度、という4次元の組み合わせによって紐帯の強さを測るとし（Granovetter1973=2006：125）、このうち関係性の薄い「弱い紐帯」に注目した。

<sup>3</sup> パットナム・ゴスは、社会関係資本の分類方法に関する研究者間の論争を踏まえ、「公式な社会関係資本 対 非公式な社会関係資本」「太い社会関係資本 対 細い社会関係資本」「内向的社会関係資本 対 外向的社会関係資本」「橋渡し型社会関係資本 対 接合型社会関係資本」という四つの基準に例示した。これらの分類基準は相互に排他的ではなく、補完的であると説明されている。

<sup>4</sup> グラノヴェッターの「弱い紐帯」と同義である。

<sup>5</sup> Putnam&Goss2002=2013：8-9

<sup>6</sup> これに対して接合型は「重要な属性（民族性、年齢、ジェンダー、社会階級等々）の面で互いに似通った人々を結びつける」（同書：9-10）。

型社会関係資本としての性格を内包している。ここで、趣味縁概念の提起された背景について確認しておこう。

## 2.4 趣味縁概念の背景

趣味縁という用語そのものは、井上（1987）において初めて用いられた（加藤 2017：47）。井上は、1985年当時の現代に立って、「血縁と地縁をのぞくすべてを、社縁という抽象的なカテゴリーだけでおおいつくそうとすることには、無理がある」（井上 1987：245）との考えから、社縁<sup>7</sup>の中身を再検討することを試みた。その結果井上は、この概念の変容に関する今日的な状況を踏まえて、人間関係における結合の契機の特徴をもとに、社縁を「趣味縁」「選択縁」「情報縁」の3つに要約している。ここでの「趣味縁」は、何らかの目的や目標を機縁にその達成のためにつくられる「目的志向型」の結社に対し、同好の士という機縁によって活動そのものを目的とする「愉しみ志向型」への顕著な傾向を表した呼称であった（井上 1987：250-251）。そして、この「趣味縁」を重視する私生活化の傾向と相まって、加入と脱退が選択自由で、集団内の統制がゆるやかな「選択縁」的社縁の人間関係が強く求められていると推測している（同書：253）。

井上の収録されている『現代日本文化における伝統と変容 3 日本人の人間関係』は、同名テーマで1985年に開催されたシンポジウムの成果をまとめたものであるが、当該書籍に収録されている他の論文も「選べる縁」として「社縁から選択縁へ」の変化を論題にしている（上野 1987）。上野は、「会社縁」に代表される社縁（結社縁）にも、血縁・地縁と同様に「オリる自由」がないことに着目した。そして、脱退・離脱も「選べる」新しい人間関係として「選択縁」を主張し、その「純粋なモデル」に、血縁・地縁・社縁のいずれからも自立し

<sup>7</sup> 「社縁」は、血縁・地縁が副次的となり、会社縁をはじめとする人為的な集団による人間関係が生活の中心となりゆく時代を表すために、「会社、結社の社」「なにかの目的が機縁になってつくられたつながりを指すもの」（米山 1981：124）との定義で提起された概念である。

た、趣味や信条の集まりを挙げている。井上と上野は、加入の選択性と離脱への非拘束性について、血縁・地縁や社縁とは異なる結びつきを探求していたと言えよう。

こうした選択縁への注目も集まる中、趣味縁を直接論じた最初の論考が藤田(1991)である(加藤 2017: 47)。藤田は、産業化・都市化と学校教育の拡大にもなって確立してきた社会形態を「分節型社会」と呼んだ上で、高度経済成長期以降に顕在化してきた社会形態を「クロスオーバー型社会」と表し、後者への変容を論じた。前者は、社会生活の諸活動が明瞭に分節され、これに対応して生活の時空間とライフコースも〈職場〉〈学校〉〈家庭・地域〉という3つの空間に分割されている社会を指す。そこでの人間関係のあり方は、加入の任意性と限定の人間関係を特徴とした〈社縁〉を基にしたものだった。しかし、やがて情報化やサービス化をはじめとする〈境界解体的変化〉を受けて、それまでの分割されていた諸活動が相互に入り込み重なり合う、クロスオーバー型の社会が出現してきたという。この「クロスオーバー型社会」での人間関係は、加入が任意的であるだけでなく、拘束性を嫌う、制度的・組織的色彩の乏しいものである。ゆえに、加入は任意でも、制度や組織に基盤があるために拘束的になりがちな社縁的關係とは異質であり、また加入が強制的で包括的な人間関係である血縁的・地縁的關係とも異なる。藤田はこの新しいタイプの人間関係を、関係成立と持続の契機としての〈趣味・好み〉の共通性を重視して「趣味縁」と呼び、「多様な趣味縁の關係がクロスオーバーしている社会」をこれからの社会の望ましい在り方として論じた(藤田 1991: 29-30)。ここから読み取れるのは、趣味縁が選択性・非拘束性・開放性を特徴とすることが、同時に同質的な血縁・地縁と拘束的な社縁といった従来の枠組みを越えたつながりとして考察されていたということである。

### 3. 先行研究のレビュー

前章で確認した通り、趣味縁に対してはもとより血縁・地縁・社縁とは異なる意味と機能が求められてきた。しかし、これが現実的に妥当かという点につ

いて、趣味縁と橋渡し型社会関係資本との関係から検討するため、本章では趣味縁研究のレビューを行う。

### 3.1 趣味縁研究の現在

近年の趣味縁研究として代表的なのは、若者と趣味縁の関係について検討した浅野(2011;2012)である。浅野は、人は趣味を仲立ちとすると自分とは異質な他者とも協力し対等に付き合っていこうとするとの関心に立ち、趣味縁がそうしたつきあい方——公共性や社会参加を若者に提供する可能性を分析した。そこで補助線として用いられたのが、パットナムの社会関係資本論である。その基本的な仮説の中にある「2次的結社」(特定の目的や関心を共有する水平的、自発的な結社)の要素に趣味に関わる集団が多く例示されていることから、浅野は趣味縁こそ社会関係資本の典型であると考えた(浅野2011:46)。

この仮説に立ち浅野が提示した趣味縁論の要点を、社会関係資本との関係に注目して、次の通りにまとめよう。1点目は、先述した「選択性」や「開放性」にも関わる指摘である。それは、浅野が系譜として趣味に関する先行研究を整理した中に、中世後期から江戸時代における趣味のつながりを研究した池上(2005)が紹介されている点である。池上はこの時代に、趣味道楽や文芸・芸能を仲立ちとして人々が社会的身分を越えて結びついていた有様を主題とし、こうしたネットワークの交差する場に出現するコミュニケーションの場を「美的パブリック圏」と呼んだ。そして、抑圧的・閉鎖的になりがちである政治的な絆や領域的・血縁的な絆とは違って、開放的で柔軟さを持った趣味仲間の組織が、人々を予期せぬ仕方でも結びつける「弱い紐帯」を数多く築いたと指摘している(池上2005:18-19)<sup>8</sup>。浅野はこれを、江戸期の趣味のネットワークに橋渡し型社会関係資本や2次的結社と同様のはたらきがあったことを示す、趣味縁の好例として挙げている(浅野2011:66)。

2点目は、趣味縁には単なる「仲良し」を超える作法があると指摘した点である。異質性を共感によって消去するだけでは、ただの「仲良し」共同体となってしまう。しかし、趣味縁は、その3つの特徴によって、仲の良い相手と

も時には協力できる作法、すなわち公共性を身につけるといふ社会関係資本の機能を持つと浅野は主張した。その趣味縁の特徴とは、①趣味への愛が趣味縁内部に強い葛藤を生むこと、②その葛藤もやはり趣味への愛によって克服されること、③克服の過程の要に敬意と謙虚さがあることだとされる（浅野 2011：50-58）。とりわけ浅野は、パットナムが趣味集団をはじめとする2次的結社の特徴として対等な参加者同士による水平のネットワークであることを強調したのに対し、それと同じくらい重要なのは、技量を軸としてはっきりとした垂直の関係を構成することだと主張した（浅野 2011：57）。それが成員間に敬意と謙虚さを持たせ、対立の克服に寄与しているとの論を、オタクへの考察で展開しているのである。つまり、浅野の想定する趣味縁とは、趣味への愛や目的を共有することで人格的な好悪を超えて人々が協力し合う関係をもたらし、そこで発生する葛藤や衝突も、技量を軸にした垂直的な関係性から生まれる敬意と謙虚さによって克服されるというつながりである。

そして3点目が、量的調査によって明らかになった、日本の若者における趣味縁と公共性、政治参加との関係である。浅野は社会関係資本を（2次的結社等の）ネットワーク、一般的信頼、互酬性の規範の3つの要素によって定義されると示した上で、趣味縁に「趣味集団」と「趣味友人」という2つの下位概念を設定し（浅野 2011：49）、当該研究では特に2次的結社の形をとる趣味集団に注目した。そして、青年文化研究会が2007年に東京都杉並区で実施した調査（以下、杉並調査）の結果を分析し、社会関係資本の要素である2次的結社（を含むネットワーク）および一般的信頼との関係について考察した。その結果（浅野 2011：94-117）では、主に①日本の場合、2次的結社は一般的信頼

<sup>8</sup> 池上はこうした芸能サークル活動の特長として、自発性・水平性以上にこの開放性・柔軟性を重視している。それは、「強烈的な結合力をもつ水平的結社組織が覇権的な力を手に入れれば、たとえももとは自発的結社であっても、自分の組織のメンバーに息の詰まるような規律を課す一方で、他の人びとを排除しにかかることもあるだろう。それとは対照的に、比較的その場その場な形の切り換えやつなぎ直しを許容するようなネットワーク連結をもつ社会は、個人に力を与え、本質的に開放的かつ柔軟な社会だと言ふことができ」（池上：19）るためである。

とはあまり関係がなく、むしろ日本への誇りや生活満足度との関係が密接であること、②趣味友人の有無と社会参加の間には意味ある関係は見出せず、一方で趣味集団とは異なるいくつかの集団に所属する「集団所属の多元性」とは関係が認められること、③パトナムが2次の結社に期待した機能を、日本の若者においては「仲のよい友だち」が担っている可能性があること等が示されている。浅野は若者の公共性との関係を追究したため、趣味縁と社会関係資本との関係について直截な結論を示してはいないが、パトナム型の論をそのまま導入することには慎重な姿勢をとるに至っている。

一方、辻 (2015) は浅野と同じ杉並調査の結果を用いながら、主に趣味友人の方に着目して、趣味縁の有無と若者たちの人間関係の全体的なありようとの関連について、パーソナル・ネットワーク論の方法から検討を行った<sup>9</sup>。そこから導き出された知見は以下の3点であった。第1に辻は、「『趣味友人』あるいは『趣味縁的ネットワーク』においても、趣味の内容に応じた、さらなる下位分類がありうる」と指摘する (辻 2015 : 155)。因子分析の結果が示す特徴の違いから、「旅行」や「消費」を広義の「消費行動型の趣味」、「ACG<sup>10</sup>」や「スポーツ」などを「特定課題達成型の趣味」と仮称し、前者の方が人間関係全般のアクティブさやネットワークの「多重送信」性などが高かったと分析した。第2にしかし、そうした状況は、同じ相手とは多様な関係を取り結んでいるというネットワークの「内容的」な側面を表しているだけで、「形式的」な側面での多様性を反映したものではないことに注意を促す。友人の数の多さに対して、異性や異年齢の比率では有意な差がなく、むしろ密度が高かったためである。この結果から辻は、若者の友人関係に全般的な同質化が指摘されていることを念頭に、「果たして『趣味縁』を通して、本当に『異質で多様な他者との出会い』がなされるかという点について言えば、決して楽観的なことは言えないのでは

<sup>9</sup> 辻は、かつての戦後サークル研究が「集団」としての特質をそなえたサークルを対象としていたことを示した上で、「だが必ずしも『趣味縁』は『集団』のようなありようをしているわけではないだろう」として、「趣味友人」を研究対象としている。(辻 2015 : 146)

<sup>10</sup> 「アニメ、コミック＝マンガ、ゲーム」(辻 2015 : 155) を指す。

ないだろうか」と疑問を呈している（辻 2015：160）。以上の分析を踏まえて、辻は第3に、趣味縁的な人間関係を有することは若者たちにとって重要な位置づけを持つものの、「近年の議論が言うように、社会関係資本として期待しうるものなのかどうかについては、今後もさらに詳細にとらえていくことが必要だろう」と課題を示した（同上）。

辻の指摘したこれらの論点は、他の趣味縁研究をレビューする上でも重要である。なぜなら、同じ「趣味縁」概念が様々な性質の趣味・趣味縁に対して用いられている現状があり、またそのことは、橋渡し型社会関係資本としての振る舞いにも当然異なる様相を示すからである。浅野と辻は主に若者を対象に趣味縁を検討したものであったが、管見の限り、近年の趣味縁研究はまちづくりや地域振興を主題にしたものと、先にも挙げたいわゆる「ACG」に該当する趣味を扱ったものとに大別できよう。以下のレビューでは、異なるフィールドで研究された趣味縁の特徴から、その社会関係資本としての性格に注目し、次章での考察に繋げていく。

### 3.2 地域型趣味縁の研究

まちづくりや地域振興に関する趣味縁研究には、その趣味縁の生起方法の違いによって主に2種類があると考えられる。ひとつはアニメの聖地巡礼にみられるような、特定の作品・ジャンルを契機として発生する趣味縁であり、他方は、地域を拠点として趣味の領域を体現するプラットフォームから発生する趣味縁である。ただし、どちらの場合も、趣味縁に地縁との密接なつながりが見出されている点に特徴があるといえよう。まず本節では後者の事例研究をレビューし、議論の便宜上、そうした趣味縁を「地域型趣味縁」と呼んで分類しておこう<sup>11</sup>。

<sup>11</sup> 無論、全ての趣味が「地域」や「ACG」に該当する訳ではないが、先述の趣味縁研究の現状に加え、「2.1. 趣味縁の定義」で触れた、趣味縁の語の使用対象の違いも踏まえて、本稿では以降「地域型」「ACG型」の類型に趣味縁を整理し、後の考察につなげる。

地域に開設された趣味の交流プラットフォームに関する研究として、加藤の2点の論考(2016;2017)があげられる。加藤(2017)は浅野を含む先行研究を概観することで、趣味縁の特色を①社会的「有用性」からの逸脱、②「選択縁」であること、③所属する社会集団内での既存の役割からの解放(脱役割)と変身が可能であることの3つに見出している(加藤2017:49)。このことから加藤は、趣味縁に「社会的『有用性』を離れたところにある、個々人の選択性、参加の自主性によって成立する領域」(加藤2017:49)との定義付けを行った<sup>12</sup>。その上で、趣味縁の商業空間への波及効果を検討するため、趣味縁の担い手がまちづくりのプレイヤーとなっている事例として「前橋〇〇部」を調査している。その結果は、趣味のプラットフォームが趣味縁の上記3点の特徴と商店街の空間利用上の需要とを合致させている有様を示した。群馬県の地域づくり団体に関する研究として同じ事例を扱った友岡(2015)は、そのつながりの性質を群馬県の地域性に注目して検討した。それは、「群馬県のような人口規模の大きくない地方では、ある特定の活動を始めて一定期間が経過すると、その活動に関する“世界”に参入している人の殆どとんならかの関係ができてしま」い、また「地方では人が交流するための物理的拠点が限られているため、知人同士が(飲食店等で)意図せずに出会う機会も非常に多く、不可避的に対面的なコミュニケーションも維持されやすい」という、地理的条件が生む現実である(友岡2015:27)。この条件と参加の非強制性を踏まえたとき、群馬県の地域振興団体が作りだす社会関係は「弱い絆」とは呼べず、また「橋渡し型社会関係資本」とも「結束型社会関係資本」ともみなせないとして、友岡は「中規模で半固定的な社会的ネットワーク」を意味する「中庸のネットワーク」と

<sup>12</sup> なお加藤(2016)は、アートと趣味縁の拠点の1例として、市民有志によって設立された「OYOYOゼミ」(札幌市)を取り上げ、その機能を検討したものであるが、ここでは趣味縁の特徴を、「友人達と部分的に深い関係を結」び(浅野の主張)、「本人の自発的意思のみで紐帯が形成されているために、離脱に関して拘束力がない」(友岡2015:30)性格に求めている(加藤2016:40)。そして、加藤(2016)の議論で重要なのは、OYOYOゼミのあり方が、こうした趣味縁の特徴と現代人の求める人間関係の両方の需要を満たすものとして分析されている点である。これらは先述の選択性・非拘束性と同義であり、現代的なつながりを研究する上で大きなヒントである。

いう呼称を提示するに至った(同上)。このことから、趣味縁を通じて築かれるつながりの性質が、その根ざしている場所性によって異なったものになる有様を読み取ることが出来よう。

なお、こうした趣味縁と地縁との関係性については、オープンガーデンの運営に関するインタビュー調査を行った土屋・林・崎本(2020)でも興味深い言及がなされている。この研究は、運営主体としての行政と民間の関わり方がそれぞれ異なる深谷市、大磯市、小平市のオープンガーデンを比較することで、3者の特性に、地縁と趣味縁の関係性や双方の志向性の強弱の点で違いがあることを明らかにした。ここからも、地縁と趣味縁への比重の如何が運営のあり方と関係していることが読み取れる。

### 3.3 ACG型趣味縁の研究

大戸・伊藤(2020)は、浅野が追究した「つながりの作法」について、2次創作を行う「腐女子」の同人作家コミュニティを観察し検討を行った。そこでは、「趣味縁は現実空間(対面状況)のみによって結ばれるわけではなく、「現在では情報通信技術の進展によって、仮想空間上でも成員が共通の関心などを持って集うオンライン・コミュニティが形成され、それによって結びつくことが多い」(大戸・伊藤 2020:155)という、現代的なつながりの契機が視野に入れられている。この重要な認識の上で大戸・伊藤は、異質な個人がつながり合うことによる様々な衝突に関心を向け、「成員間の異なる属性や非対称性がどのように内部で処理され、趣味の活動の場が形成・維持されているのか」という問題を提起した(同書:154-155)。これはまさしく、趣味縁に橋渡し型社会関係資本性を見込んで検討したものとも言えよう。そうした観点から概観すると、大戸・伊藤(2019;2020)の以下の指摘は重要である。

ひとつは、同人作家コミュニティの中には同人誌の売り上げや影響力に基づいて「大手」を頂点としたヒエラルキーが形成されており、コミュニティ内における認知度の高まりは、作品の評価される場(人的ネットワーク)を広げ、「地位」や「名誉」を得る機会を増大させることを意味するとの指摘である(大

戸・伊藤 2019 : 225 ; 2020 : 159)。これはすなわち、作品に対する評価によって、「人的ネットワーク」つまり社会関係資本の源泉に不平等が発生することを示していると考えられよう。2つ目は、個人の属性を問うことや認知や評価への欲求を成員に伝えること、また金銭的话题を持ち出すことといった、コミュニティ内のタブーの存在を指摘している点である。大戸・伊藤 (2020) はこれらを、成員間の異なる属性や非対称性による対立を未然に回避するための徹底された規範意識として提示している。つまり、匿名性と高い類似性<sup>13</sup>によって安定しているコミュニティにおいては、個人間の差異や格差が可視化されることはコミュニティの瓦解を招きかねないため、上述のような規範意識を成員間で徹底的に共有し、外部の評価軸が存在しないかの如く振る舞うことで、内的調和を保とうとしているのである (同書 : 162)。そして、これらの発見をもとに、腐女子たちが「排除しようと苦心している、ある種の競争性を持ったシステムが彼女たちのコミュニティの中で再現されてしまっている」という興味深い論及に至った (同上)。こうした「つながりの作法は、2次創作を行う腐女子の同人作家のコミュニティだけではなく、オタクのコミュニティ、ひいては趣味のコミュニティへと、さらに広く適応できる可能性を持っている」と大戸・伊藤は考察している (同上)。

大戸・伊藤によるこれらの重要な指摘は、趣味縁を橋渡し型社会関係資本として分析することに対し、いくつかの別な切り口を提示するものとなり得る。この点については、次章の考察で取り上げたい。

### 3.4 地域型×ACG型趣味縁の研究

さて、ここまで「地域型趣味縁」「ACG型趣味縁」と大別して近年の先行研究をレビューしてきたが、この両者にまたがる趣味活動も今や珍しいものではなくなっている。その代表格とも言えるのが、いわゆる「アニメ聖地<sup>14</sup>巡礼」

<sup>13</sup> ペンネームやハンドルネームで互いを呼び合う匿名性と、「腐女子であること」「同じ原作のファンであること」「同じカップリングが好きであること」といった幾重ものフィルターを通した、極めて高い嗜好の類似性。(大戸・伊藤 2020 : 157)

活動であり、これを通した人々のつながりについては谷村（2019）に詳しい。

谷村は、「アニメ聖地巡礼」現象においてファンが地域とどのように関係を築き、「聖地化」の過渡期でどのような行動をとっていくのかという点に、事例研究を通して迫った。沼津市を舞台にしたこの事例では、地域側の取組のみならず、ファンの側が案内所の整備や「勉強会」、清掃活動等を通した地域への関与を試みたことで、ファン同士が地域活動の基盤を形成することとなり、地域とのつながりをもつくりだしていった（谷村 2019：83-85）。そして、こうしたファン活動について谷村は、社会関係資本の観点から考察を行った。同じ作品のファンであるという「薄い信頼」で結ばれた人々が、自分たちを地域に受け入れてもらうことを狙って地域活動を発案し参与していくことは、地域住民とアニメファン、またファン同士の間の信頼関係を強め、互いが関わり合うことのメリットを自覚していく経験となる。つまり「互酬性の規範」を強めることになる」と谷村は指摘した（同書：86）。この沼津市における「アニメ聖地化」過渡期のファン活動からは、「ファン同士や地域-ファン間の「橋渡し型社会関係資本」を醸成する機能」と「橋渡し」的に形成された社会的ネットワークが、地域社会に埋め込まれたものへとになっていくプロセス」が見出せるのである（同上）。

先に、「地域型趣味縁」「ACG型趣味縁」という呼称を議論の便宜のために用いると断ったが、それは同じ趣味にジャンル分けされるものであっても、そこで発生する活動はまちまちだと想像されるからである。例えばACGを趣味に持つことは、辻（2015）においては「課題達成型の趣味縁」とされたが、谷村から分かるように、アニメ聖地巡礼という「旅行」（＝「消費行動型の趣味縁」）をACG趣味の中で好んで行き、両方のタイプの趣味縁、更にはその土地との新たなつながりまでも獲得していくケースが考えられる。同じジャンルであっても、趣味縁の持ち方や活動の方向性などには複数の様式があるという点には留意

<sup>14</sup> 土師祭において「千貫神輿」と「らき☆すた神輿」が並んで担がれている現象について山村は、こうしたアニメ聖地のあり方を地縁と趣味縁の併存として解説している。（山村 2014）

すべきであり、十分な注意が必要であろう。

#### 4. 考察

前章でのレビューが示した議論を検討すると、今後の趣味縁研究における課題は大方、「社会関係資本としての趣味縁が持つ（互酬性の）規範とは何か」という問いに集約できるものと筆者は考える。この問題提起について、本章では以下の論点を通して考察していきたい。

- (1) 趣味縁は「異質な」他者を結び付ける橋渡し型社会関係資本なのか。
- (2) 趣味縁における「互酬性の規範」とは何か。
- (3) 趣味縁に「結社型社縁」性はないのか。

これらの互いに関係する3つの論点に沿って、課題を考察していく。

##### 4.1 趣味縁は「異質な」他者を結び付ける橋渡し型社会関係資本なのか

辻は、趣味縁が「異質な他者との出会い」をもたらすという見方や、社会関係資本としての期待度に疑問を呈していたが、本稿のレビューを通して、この点について慎重な検討が必要であることが推察される。

浅野が趣味縁に、単なる「仲良し」を乗り越えて、人々が異質性を持ったまま協力し合える作法を身に付ける効果を求めていたのに対し、辻は趣味縁を通して友人関係に同質化が見られることを示した<sup>15</sup>。一方、大戸・伊藤が明らかにしたのは、タブーを共有し、個人間の差異等を表出しないことによって、対立を未然に回避している同人作家コミュニティの有様であった。これは言い換えれば、異質な他者との協力が、浅野のように趣味への愛によって克服されるだけではなく、差異と見なせるものを個々人が規制することによって実現されているということである。

<sup>15</sup> 両者は同じく若者を対象として杉並調査を検証しながらも、浅野は趣味集団に、辻は趣味友人に焦点を合わせているという違いはある。また筆者の関心も趣味集団に軸を置くが、しかし後述するように、趣味集団と趣味友人はつながったものであり、また筆者は趣味集団の中で趣味友人を見つけ、あるいは趣味友人から趣味集団に辿り着く可能性を考えているため、考察ではあえて別個のものとして扱わない。

そもそも、同質性を特徴とする結束型と異質性を特徴とする橋渡し型とは、明確に区別されるカテゴリーではなく、それぞれの事例に対してよりどちらの傾向が大きいか、小さいかという次元のことであり（Putnam2000=2006：21）、集団ごとに両者の組み合わせは様々である（Putnam and Goss2002=2013：10）という点には注意したい。

浅野は、趣味を仲立ちとして異質な他者との交渉が発生することを本質的に重視しているパットナムの姿勢に注目しつつ、2次の結社の極に趣味集団、インフォーマルな関係の極に趣味友人を位置づけ、両者はある程度連続しているものと前提した（浅野 2011：49）。そして、この趣味縁メーターとでも呼べるようなものに、「マッハー／シュムザー」「架橋型／結束型」の区別を重ね合わせた対応関係を仮定して、分析を行っている。いわば、橋渡し型と結束型のグラデーションを提示したのであり、この点は先のパットナムの注意と同様に受け止めることが出来る。

問題は、趣味縁研究においてこの「橋渡し型か、結束型か」「異質な者のつながりか、同質な者のつながりか」という点を、どのような側面から検討するかということである。上述の注意に従えば、個々の事例における趣味縁の性質に目を向けることが重要であろう。その性質の見方については、今般のレビューを踏まえると、少なくとも次の2点を指摘することが出来る。1点目に、縁を獲得する「場」の性質がある。人々の出会いや交流の契機が、地域に根差したリアルなプラットフォームにあるケース（加藤）と、特定のカップリングをもとに基本的にはSNSといったオンラインにあるケース（大戸・伊藤）とでは、成員の性質に差が生じるであろう。リアルとSNSの両方を用いてファンと地域住民が橋渡されるケース（谷村）や、「場」の地理的条件によって「中庸のネットワーク」（友岡）のようなケースが報告されていることから、まさに橋渡し型と結束型とのグラデーションの存在を講ずることが出来る。これに関連して2点目は、その趣味縁研究の想定する「異質さ」の性質である。浅野の言う「異質」は価値観の違い等を想定したものと考えられるが、辻は異性や異年齢の比率の低さに着目しており、一方大戸・伊藤は、性別は皆女性だが年齢や職業が

多様であることを指摘している。このように、論者によって想定している異質性の基準は異なる。趣味縁がどのような人々を結びつけるのかという点に関しては、この趣味縁を獲得する「場」の性質と当該趣味縁の「異質性」の性質との双方を、個別の事例に合わせて見極めねばならず、いわゆる「趣味縁」全体について確たるひとつの解は持たないであろう<sup>16</sup>。

ただし、このことをもって、趣味縁を社会関係資本として捉える可能性を見限ることもまた、早計であると考ええる。それは、「結束型」の持つ排斥的な特徴や社会関係資本のダークサイドといった要素は、趣味縁を考察する際の補助線となる可能性はあるからである。この点について、次節を通して更なる検討を行う。

#### 4.2 趣味縁における「互酬性の規範」とは何か

浅野は、パットナムが対等な参加者同士の水平のネットワークを強調したのに対し、これと同様に肝要なものとして、技量を軸とした垂直の関係を挙げていた(浅野 2011: 57)。先述の通り、そこでは趣味への愛、「敬意と謙虚さ」と表現される承認関係が、「仲良し」を超える作法として機能すると分析されている(同書: 51, 56-58)。

一方で大戸・伊藤は、同じ「趣味への愛」に異なるつながりの作法を発見した。まずコミュニティ内には、対象への「愛」の具現化である2次創作作品やTwitterのフォロワー数等が評価されることによってヒエラルキー、すなわち垂直の関係が構築されている。その中でメンバーは、ネタがかぶることや「大

<sup>16</sup> 加藤(2016)が取り上げた「OYOYOゼミ」では、メンバー個々の発表や企画提案が順番に回ってくるという活動形態となっているため、年齢も所属も異なるメンバーが対等な発言権・参加権を持つ。これにより、序列が固定化されることなく、共感をベースに相互の異質性を楽しむという、独特な場が創造されている(加藤 2016: 39)。このことから、趣味縁のある場所の性質のみならず、運営・活動形態によっても、会員間の関係やその「異質性」の受け止められ方が異なることがわかる(運営形態の影響度はオープンガーデンの事例からも読み取ることが出来る)。当該事例は市民交流のプラットフォームとしての色合いが強く、筆者の研究関心とは離れるが、会員の平等性や一般的信頼を考える上でも重要な論考であるので、今後の研究課題としたい。

手」の存在、表現の許容範囲等を気に掛けて創作することで衝突を避けている。そして、原作やキャラクター、カップリングに対する「愛」の如何によってはメンバーをコミュニティのソトに追い出し、あるいは自分とは異なる価値観（解釈）を持つメンバーを否定しないことでコミュニティ瓦解のリスクを回避していた（大戸・伊藤 2019：228）。闘争に対するこうした調停方法は、言うなれば条件付きの「敬意と謙虚さ」、不文律による規範の統制のもとに成立しているものであろう。このように、タブーや評価、そして先述の異質性を排除する規範の中で振る舞うことによって、はじめて成員は趣味を共有するという楽しみを享受することが可能になるのである。

「好きなもの」という極めて狭い1点によってつながった人々は、前節で触れたように、個々人の異質さを表出しないことによって別の次元の同質さを築いていく。本節の議論と併せると、趣味を仲立ちとすることが異質な他者への寛容・「信頼」を育み「互酬性の規範」を成立させているというよりは、趣味コミュニティを維持させるために「規範」を徹底させ、異質性を削ぎ落とすことで、互いへの寛容性を保っているという、一見同じようで逆のプロセスを踏んでいると捉えることが出来るのではないか。異質な他者が集まる場であることと、異質な他者を包摂しつつコミュニティが維持されていくこととの間には、こうした意味の違いがあると言えよう。いわば、趣味縁の持つ「互酬性の規範」のダークサイドである。

趣味コミュニティが成員をソトに追い出す様子は、趣味縁概念に依拠して市民ランナーのコミュニティを研究した菅谷（2020）にも見出すことが出来る。SNSを通じて誰でも参加できる「ランナーズ X（仮称）」は、匿名性を保ったまま異質な他者とランニングを実践するコミュニティであり、役割分担等もない非制度的組織で、開放的かつ包括的な性格を持つ。しかし、メンバーの固定化とコミュニティの凝集性の高まりに起因する対立や、お揃いの T シャツのせいで参加しづらくなるメンバーが発生する等、帰属意識やランニングへの志向性をめぐる対立と離脱という、コミュニティの排他的な一面が顕れたことが報告されている。この仲間意識の高まりと排他性は、大戸・伊藤とも共通性のあ

る現象であろう。

社会関係資本がもたらす負の側面については、コールマンによる社会関係資本論が幾らかのヒントを与えてくれる。そこでは、何らかの目的のための資源が他の資源と組み合わせたときに、システムの別レベルの行動が生み出され、個人に対しても異なる効果が生まれる可能性が示されている (Coleman1988 = 2006 : 213)。また、効果的な規範は社会関係資本の有力な一形態であり、人々に制約的な規範を守らせることが、ある行為とその効果を促進する一方で、別の行為とその効果を抑制・減少させることがあるとの指摘がある (同書 : 217-218)。上述の議論に当て嵌めれば、趣味コミュニティが「楽しみの共有」とは別に、「認知や評価」の獲得を目指す社会関係資本と組み合わせることで、何らかの「(互酬性の) 規範」を作り出し、またその効果の裏返しとして成員への拘束性を表すという構造も考えられるのではないか。

趣味縁を社会関係資本の観点から分析した浅野は、「2次的結社／ネットワーク」「一般的信頼」「互酬性の規範」という社会関係資本の3大要素に対して、「2次的結社／ネットワーク」については「趣味集団／趣味友人」という趣味縁の下位分類を宛がい、「一般的信頼」については杉並調査から寛容度を分析して「日本への誇りや生活満足度」といった日本の若者内の特徴を見出していたものと考えられる。故に、3つ目の要素である「互酬性の規範」については、さらなる研究の余地があると言えよう。

#### 4.3 趣味縁に「結社型社縁」性はないのか

社縁は元来、血縁・地縁以外の人間関係を、目的・目標が機縁となつてつくられたつながりとして表した概念であった。それは特に「結社縁」を指して用いられ、その性質については、参入の選択は自由だが離脱には拘束性があるものとして分析されてきた (以下、これを「結社型社縁」と呼ぶ)。しかし、その後注目されてきたのは「楽しみ (愉しみ)」を契機にしたつながりであつて、ここでは離脱も自由に選べることが特徴とされている。趣味縁はまさにこのタイプ (以下、「同好の士型社縁」と呼ぶ) であり<sup>17</sup>、つながりの契機と離脱の自由

度において、全般的に「結社型社縁」とは異なる縁として捉えられてきたと言えよう。

しかし前節までの考察を踏まえると、両者の間に想定されていたこれら2点の違いは、それぞれ以下のような現象によって薄れてしまうのではないか。まず、「楽しみ（の共有）」の中に「評価」や「名誉」等の何らかの目的・目標が発生する、あるいはその「楽しみ」自体が「目的」化することがあり得る。この場合、趣味縁は「結社型社縁」の性質に近づくことになるのではないか。また、ある趣味縁に何らかの規範が機能しているのならば、それはそこにある程度の拘束性があるからだとも考えられる。筆者は、趣味の対象が「好きである」ということが、実際には所属に関して一定の拘束力を持ち、ある種の「動けぬつきあい<sup>18</sup>」を形成し、よって「結社型社縁」的な性格を生むものと推察する。だからこそ、明確な結社の形をとらず、興味関心が他作品等に移れば消滅する「期間限定的な関係」（大戸・伊藤 2020：158）にも規範がはたらく可能性が示されているのではないか。

以上のことから、「同好の士型社縁」としてみなされてきた趣味縁においても、「楽しみ」に何らかの「目的・目標」性が発生することや、趣味が一定の拘束性を喚起することによっては、「結社型社縁」への接近がしばしば起こり得るものとする。

## 5. おわりに—今後の研究に向けて

本稿では、先行研究のレビューを通して、趣味縁をめぐる研究の動向と展望

<sup>17</sup> 本稿の冒頭でも触れたように、趣味縁研究は開放性や非拘束性、別言すればその流動性にも着目してきた。

<sup>18</sup> 伊藤（1976）は戦後のサークル活動に関する研究の中で、移動への拘束性によって「動けるつきあい」と「動けぬつきあい」という2種の「つきあい」の型を規定した。伊藤は「動けるつきあい」に欠如している「情緒」と「共通感覚」が「動けぬつきあい」の基礎にはあるとして重視しており（伊藤 1976：66-67）、感情的な問題に言及したと言えよう。なお浅野は伊藤の指摘するこの「動けなさ」を、パットナムが自発的結社について参入離脱の自由を想定していることとは対照的な指摘として紹介している（浅野 2011：76）。

を考察した。具体的には、趣味縁研究が指摘している役割を橋渡し型社会関係資本の観点から分析することで、趣味縁の包摂する人々の「異質さ」はその趣味縁の性質によって異なり、またコミュニティ内にある垂直的な関係性や何らかの規範が人々の振る舞いを規定し、成員の中に新たな同質性を築く可能性があることを示した。これにより、趣味縁を橋渡し型社会関係資本と見るのには留保が必要であるが、ダークサイド（負の効果）も含めて、社会関係資本を補助線に、とりわけ趣味縁の「互酬性の規範」についてさらなる検討を行う意義はあるものと考ええる。

今般の研究を経て、筆者は主に以下の点に留意しながら今後の研究にアプローチする必要があると感じている。まず1点目として、自身の研究対象とする趣味縁では何が成員にとって同質あるいは異質なのかという点に意識的でありたい。本稿の冒頭で言及したように、筆者の現在の関心は同好の士によるある程度集団的な趣味縁にあるが、「場」の性質や「異質さ」の基準といったつながりの契機を持つ内容的・形式的異質性を見極めることが肝心であろう<sup>19</sup>。

これと関連して2点目に、趣味行為への慎重な考察が求められる。趣味に下位分類が存在するのみならず、同じジャンルの趣味であっても何を愛好の対象とし、どのような活動に注力するかは多様であり得る。また、例えば大戸・伊藤からも分かるように、創作という趣味行為の性質がコミュニティ内に「評価」軸と垂直な人間関係をもたらし、「認知」や「名誉」を目標にした競争を生み、人的ネットワークの多寡という不平等も発生させる。つまり行為の性質がつながりの性質に影響するという点には、今後留意しておきたい。

3点目は、その趣味コミュニティ内での「互酬性」と「規範」の意味である。成員とコミュニティにとって何が「互酬性」であると認識され、それを維持す

<sup>19</sup> コミュニティカフェとモビリティについて研究した田所（2014）は、「COLUMN 新しい“地縁”のかたち」と題して、コミュニティカフェ参加者の女性（30代）の話を紹介している。そこで注目すべきは、同じ趣味嗜好でつながることにこそ偏りを感じ、むしろその枠を越えられるものとして地縁に新鮮さを感じている都市生活者の姿である（田所 2014：105）。このことは、地縁や趣味縁の指す性質が時代とともに変化している点に注意を促してくれる。

るためにいかなる「規範」を共有させているのかという問題関心は、今後の研究において最も深い示唆をもたらすと考える。これは、趣味の共有が異質性や対立を乗り越えるだけの影響力を持つか否かという問いや、趣味縁の中の「拘束性」の存否と合わさって、先行研究の間隙を埋める知見をもたらすのではなからうか<sup>20</sup>。

ここで、藤田（1991）による重要な指摘を想起したい。それは、「〈趣味縁〉が制度的・組織的基盤を必要としない、打算的でない、任意的な関係であるだけに、非常に排他性の強い閉鎖的關係になる傾性をもっている」との見方である（藤田 1991：30）<sup>21</sup>。藤田はこの点について深く検討するまでには至らなかったが、趣味縁の持つ排他的な側面について確かに言及していた。上述の諸点に留意しながら、趣味縁のダークサイドにアプローチすることを目指していきたい。

最後に、今後の課題について、本稿では取り扱えなかった切り口を2点挙げたい。第1に、匿名性の効果と多元的所属・アイデンティティの多元性の問題である。ハンドルネームやペンネームで活動すること<sup>22</sup>は、オンラインを出会いのプラットフォームとする現代ではますます珍しくない現象となっている。本名という名の生身の自分を血縁・地縁・社縁に置きつつ、それとは別のアイデンティティを複数の趣味縁の中で育むことは、どのような現象だといえるのか、検討を深めたい。第2に、趣味縁と類似した他の概念への研究を進めることで

<sup>20</sup> 「拘束性」について、大戸・伊藤が調査対象とした腐女子の同人作家コミュニティは極めて興味深い事例である。このコミュニティは、SNSでのつながりや即売会での交流はあるものの、協働する集団を形成しているわけでもなく、形成のされ方も流動的である。しかしそこには、同じジャンル・作品・カップリングを推して創作する「我々」という一種の「想像の共同体」への所属意識と、そこからくるコミュニティの「規範」が共有されているのではないか。所属が緩やかな筈のランナーズXの成員が「帰属意識」を持っている様子（菅谷 2020）にも共通性を感じる。今後この点について、関連する領域も含めて研究を深めていきたい。

<sup>21</sup> 排他性・閉鎖性の説明としては、〈好み〉が「構造的根拠も合理的根拠もなしに、他者（他のグループ）との差異を主張することができ、それが〈好み〉だという理由で、その主張を正当化することができる」こと等が挙げられている（藤田 1991：30）。

<sup>22</sup> なお、池上も俳名という名の「ペンネーム」を用いた江戸の俳人たちの「匿名制」に言及している。（池上 2005：242-244）

ある。例えば「コミュニティ・オブ・インタレスト」<sup>23</sup>の研究は、趣味縁研究と大きく関心を共にするものであると考える。本稿では扱えなかったので、今後の課題としたい。

趣味縁をめぐる近年の新動向には、高齢者に注目した小泉（2020）が現れているほか、オンラインの趣味創作コミュニティを扱った鈴木（2014）や片野・石田（2015）も趣味縁の語に触れている。趣味縁研究には今後、大きな展望が期待できよう。

#### 参考文献

- 浅野智彦（2011）『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店  
——（2012）「趣味縁から公共性へ」小谷敏・土井隆義他編『若者の現在 文化』日本図書センター：245-274.
- 池上英子（2005）『美と礼節の絆——日本における交際文化の政治的起源』NTT出版  
伊藤登志夫（1976）「サークル前史への試み」思想の科学研究会編『共同研究 集団——サークルの戦後思想史』平凡社：45-67.
- 井上忠司（1987）「社縁の人間関係」栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容 3 日本人の人間関係』ドメス出版：244-259.
- 上野千鶴子（1987）「選べる縁・選べない縁」栗田靖之編、前掲書：226-243.
- 大戸朋子・伊藤泰信（2019）「二次創作コミュニティにおける「愛」をめぐる闘争と調停」『コンタクト・ゾーン』11：207-232.  
——（2020）「趣味のコミュニティにおけるつながりの作法——二次創作を行う腐女子の同人作家を事例として」『年報人類学研究』11：154-164.
- 片岡栄美（2019）『趣味の社会学——文化・階層・ジェンダー』青弓社.
- 片野浩一・石田実（2015）「ユーザー・コミュニティ創発の創作ネットワークに関する研究——「初音ミク」コミュニティにみる価値共創」『マーケティング・ジャーナル』35（1）：88-107.
- 加藤康子（2016）「アートと趣味縁の拠点における「非クリエイティブクラス」のハー

<sup>23</sup> コミュニティ・オブ・インタレストとは「インターネットなどのテレコミュニケーション網の発達が基盤となって、地縁・血縁に依らない、趣味や関心の共通性に基づいたコミュニティが形成され、そうした集団の重要性が増していくという考え方」だとされる（森川 2005：256）。

- フシフトについて——札幌市の OYOYO ゼミの事例から』『文化経済学』13 (1): 36-44.
- (2017) 「趣味縁研究の系譜と現代社会におけるその現れの一例——群馬県前橋市「前橋〇〇部」の事例から」『文化経済学』14 (2): 46-54.
- 北田暁大・解体研編著 (2017) 『社会にとって趣味とは何か——文化社会学の方法規準』河出ブックス.
- 小泉恭子 (2020) 「音楽の聴取経験とライフヒストリー——レコード鑑賞会の参加者への聞き取り調査から」『人間生活文化研究』30: 233-244.
- 菅谷美沙都 (2020) 「市民ランナーによる趣味コミュニティの記述的分析」『ランニング学研究』31 (1): 90-92.
- 鈴木俊介 (2014) 「趣味とオンラインコミュニティ——『初音ミク』に見るボランティアの現在」長田攻一・田所承己編『〈つながる／つながらない〉の社会学——個人化する時代のコミュニティのかたち』弘文堂: 190-214.
- 田所承己 (2014) 「コミュニティカフェとモビリティ—地域空間における〈つながり〉の変容」長田・田所編、前掲書: 80-106.
- 谷村要 (2019) 『『アニメ聖地化』の過程におけるファンの地域活動への関与——静岡県沼津市の事例から』『地域活性研究』10: 79-88.
- 辻泉 (2015) 「若者たちのパーソナル・ネットワークと「趣味縁」: 2007YCRG 杉並調査の結果から」『人間関係学研究: 大妻女子大学人間関係学部紀要』17: 145-162.
- 土屋薫・林香織・崎本武志 (2020) 「オープンガーデンの継続的運営における諸課題——関東エリアのインタビュー調査をもとに」『江戸川大学紀要』30: 357-364.
- 友岡邦之 (2015) 「地域振興団体における領域横断性と『中庸のネットワーク』——群馬県の事例にみる組織論的特性の分析」『地域政策研究』17 (4): 19-31.
- 藤田英典 (1991) 「学校化・情報化と人間形成空間の変容——分節型社縁社会からクロスオーバー型趣味縁社会へ」『現代社会学研究』4: 1-33.
- 森川嘉一郎 (2005) 『「おたく」の聖地は予言する』吉見俊哉・若林幹夫編著『東京スタディーズ』紀伊国屋書店: 247-257.
- 山村高淑 (2014) 「サブカルサブリ第28回: 土師祭に見るまつりの本質: 地縁と趣味縁が併存」『埼玉新聞』2014年9月7日、特集「サイタマニア」: 2. 北海道大学学術成果コレクション、<http://hdl.handle.net/2115/56909> (2020年11月22日)
- 米山俊直 (1981) 『同時代の人類学——群れ社会からひとりもの社会へ』日本放送出版協会

- Coleman, James. S. (1988) 'Social Capital in the Creation of Human Capital', *American Journal of Sociology*, 94: S95-S120. (金光淳訳 (2006) 「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房: 205-238)
- Granovetter, Mark. S. (1973) 'The Strength of Weak Ties', *American Journal of Sociology*, 78: 1360-1380. (大岡栄美訳 (2006) 「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳、前掲書: 123-154)
- Putnam, Robert. D. (2000) *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster. (柴内康文訳 (2006) 『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房)
- Putnam, Robert. D. and Goss Kristian A. (2002) 'Introduction' in Putnam, R.D. (ed.), in *Democracies in Flux: The Evolution of Social Capital in Contemporary Society*, Oxford: Oxford University Press: 3-20. (猪口孝訳 (2013) 「社会関係資本とは何か」猪口孝訳『流動化する民主主義——先進8カ国におけるソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房: 1-17.)

(たかぎ ゆうき)

(2021年1月29日受理)